

大学入試改革に対応する英語教育Ⅲ —生成AIとの共存—

関西国際大学 客員教授
神戸山手女子中学校高等学校 校長 平井正朗



I. 生成AIの到来 —個別最適化に向けて—

生成AIによる和訳や英訳の精度は高い。文部科学省は学校での活用指針として、英会話の相手とする一方、詩や俳句など創作の場面での安易な使用は不適切としている。リスク管理に留意しつつ、民間が先行し、研究開発を進めている。英語教育で言えば、生成AIが英語の添削機能を担い、生徒が書いた間違いを適切な表現に直すことができれば、ライティング指導に格段の進歩が見込める。また個別最適化学習において、タブレット端末の答えを文脈に合う表現に修正してくれば、より多くの生徒に効率よく教えることができる。その意味で、解答に至るまでのプロセスを説明してくれる生成AIは、使い方次第で学習者自律(learner autonomy)に貢献する。た

だし、模範解答以上に参考になる反面、抽象的なこともあり、かみ砕いて説明してくれる教師の存在が生成AIとの共存の道と言える。

II. 現状把握 —中高大接続に向けて—

2023年度全国学力・学習状況調査における、中3生の英語で話す力の正答率は12.4%。4年前の前回調査と比べて18.4ポイントも下がっている。生徒の6割が0点であり、自分の考えを英語で表現するのが苦手ということが明確になっている。今回は、2021年度から実施された学習指導要領におけるコミュニケーション・ツールとしての英語の位置づけが強調され、話す力や聞く力を測定する問題が出題された。結果として、「聞く」と「読む」の正答率が5〜6割であるのに対し、「話す」は12%と低水準である。その中で、外国人留学生のプレゼンテーションを聞き、自分の考えを30秒で説明する問題の正答率は4.2%。特記すべき事項は、話す内容が浮かんでも表現が分からない生徒が41.1%を占めている点。ただし設問の場面設定が難しく、意見を表現しにくい問題が多かったこともあり、単に英語力が低いとは言にくいという指摘もある。また、話す授業に偏りすぎて英語でのやり取りが十分に

III. 表現力育成 —アウトプット活動に向けて—

人間の長期記憶に蓄えられた過去の経験や出来事についての知識を「スキーマ」と言う。例えば「Mike」という動詞なら「与える人」「受け取る人」「何を」という三つの情報が必要である。しかしそれは骨組みに過ぎず、「誰が、誰に、何を」が決まっているわけではない。実際のコミュニケーションは、相手から発せられた情報について、それぞれがもっているスキーマを駆使しながら内容理

解に行きつく。つまり、経験値を利用して次に起こる状況や行なわれるべき行動を予測するのである。いざずれにしても、長期記憶にある関連情報を最大限に活用しながら文を考えていくことが第一歩となる。

文レベルのスキルを高めていくのに重宝してきたのがコーパス(corpus)。日常で使われている言葉の例を大量に集めた、いわば言語のデータベースのこと。コーパスを通じてさまざまな場面でのような言い回しがされているのかを学び、結びつきやすい語をセットで覚えておくことネイティブのリズムに近づける。コーパスを利用した学習と言えば、コロケーション(collocation)が想起される。コロケーションとは、「濃いコーヒー」はthick coffeeではなくstrong coffee、「強雨」はstrong rainではなくheavy rain、「罪を犯す」はmake a crimeではなくcommit a crimeなどのように、「一緒に使われる語のつながり」のことであるが、生成AIがカバーしてくれる。

文と文のつながりとなる結束性(cohesion)がバラバラとなり、さらにもったテキストを構成する。流暢さの違いはその温度差から生じるもので、英語に限らずどんな言語であっても、旧情報を代名詞で表したり、反復する語句を省略して繰り返しを

避けたり、他の語に置き換えたりといった特性がある。それらは評論文リーディングの中で徹底し、アウトプット活動へとつなげたい。特に、言い換え、具体例、対比、因果関係など頻出表現の定着は、文と文、パラグラフとパラグラフの明瞭性に直結する。ここは教師の腕の見せ所である。

リーディング活動と結びつけるなら、内容を要約するサマリー・ライティングが有効。テキスト本文のポイントとなるところだけをまとめるタスクであるが、目的に応じた分析ができるようになり、自由英作文を盛り込むとインタラクティブな活動へ発展する。到達度が上がるにつれて、なるべく自分の言葉で表現したいもの。そのためには同意語への書き換えや品詞転換(paraphrasing)、簡略化する(simplifying)、複雑な文を二文に分ける(decomposing)、一文にまとめる(compounding)、難しい表現は一般化する(generalizing)、補足説明や文意を明確にする(elaborating)などのスキルを身につけておきたい。ここは生成AIと人とのコラボレーション。

苦手意識をもつ生徒にどの分野に課題があるのか尋ねると、文法が大半を占める。日本では、5文型が学校現場に定着しているが、さまざまな言語学の知見を活用するのも手段。

例えば、語彙の本質的な意味から文法を説明しようとするレキシカル・グラマーなら、「to」を説明する際、元の意味が「(対象・行為)に向き合つて」のイメージとおさえる。そして前置詞に適用させると、face to faceが「面と向かって」、dance to the musicが「音楽に合わせて踊る」などのニュアンスが理解できる。また、不定詞に適用させて、「I want to become an artist.」なら「私は芸術家になる」という、行為と向き合う、ことを欲している、↓「私は芸術家になりたい」が理解され、不定詞が「これからする(まだしていない)」未来指向と言われる理由につながる。これも教師の出番。どんな理論も万能ではないが先達の英知は参考になる。

IV. 指導における留意点 —評価に向けて—

エラー分析(Error analysis)と言えば、首尾一貫したもの、言語間の違いによるものなど、さまざまな状況がある。「首尾一貫したもの」とは、誤りを訂正されても適切に修正できない場合、また、誤りを修正してもまた同じ誤りを繰り返してしまう場合のこと。生徒は自分なりの体系を作ってしまうため、指導されてもすぐには修正しにくいものである。「言語間の違いによるもの」とは、母語の干渉が最たるもので、文法力の裏

返しとも言える。日頃から目標言語に接する機会が少ないために生じるものが大半を占める。例えば、不規則動詞を規則動詞と取り違える、語法を類似するものに置き換える、母語の干渉によって不適切な言い方にしてしまう、適切な語彙を知らずに別の表現法に言い換えてしまう、などが指摘されている。

目標言語でも母語でもない生徒が使う言語は、両者の中間に位置するという意味で、中間言語(interlanguage)と位置づけられている。目標言語の修得は発達段階と多くの類似性があり、生来的なものであることを肝に命じて指導にあたるのが重要である。

新学習指導要領には、「授業は英語で」が標榜されている。コミュニケーション・ツールとして英語を指導する場合、生徒が英語を使える環境を提供するのが授業者の責務であるが、だからといって英語しか使っていないといけないということではない。大切なのはバランス感覚。

トランス・ランゲージングと呼ばれる指導法がある。これは2つの言語を交互に切り替えながら、それぞれを効果的に用いること。英語学習において、母語リソースを自主的に活用する、日本語を部分的に使うことも尊重すべきティーチング・メソッドなのである。